

イケメン教師の受難

―伝説の運動会篇―

第三卷 羞恥と悦楽のムカデ競走

海老沢 薫 著

内容

■ 著作権について

■ まえがき

■ 第一章 屈辱のムカデ競走

■ 海老沢薫 BLOG

■ 海老沢薫 Web 連載小説

※ 海老沢薫 BLOG

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■ 著作権について

「イケメン教師の受難——伝説の運動会篇——」

第三巻 羞恥と悦楽のムカデ競走」（以下本書と表記する）の著作権は「海老沢薫」にあります。

・ 本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・ 「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・ 著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

い。

■ まえがき

学園の一大イベントである運動会で前代未聞の痴態を晒し、一躍主役に躍り出ることになったイケメン教師の三神真琴。

ああっ、みんな僕の体ばかり見てる、恥ずかしい・・・。一糸纏わぬ姿で校庭の一角に佇む真琴は大勢の視線が体中に突き刺さるのを感じ、まるで公開処刑を受けているような気分だった。

すると、そんな真琴を新たな羞恥地獄へと誘う構内アナウンスが流れる。

『三神先生に対する次なる罰として、この後のムカデ競走に参加して頂きます。三神先生至急生徒達と一緒に入場ゲートにお並びください！』

次の瞬間、校庭には生徒達の割れんばかりの拍手と歓声が轟き、真琴は担任するクラスの生徒達に腕を引っ張られて強引に入場ゲートへ連れて行かれると、そのまま競技に参加する生徒達の列に並ばされた。

そうして、真琴は体操着姿の生徒達に混じって一人だけ糸纏わぬ姿で入場ゲートから行進し、新たな羞恥地獄の舞台へと踏み出していった。

ムカデ競走は五人一組で縦に一列に並んで全員の両脚をロープで結びつけ、ムカデのようにな歩いて速さを競う競技であつた。見知らぬ三年生の男子生徒達の組に入る事になつた真琴は、あろうことか一番先頭を歩かされる羽目になり・・・。

やがて、真琴達の順番が回つてくると、イケメン教師は校庭にいる全員にその逞しい肉体のすべてを晒しながら懸命にムカデ歩きを始めた。

「おいイケメン先生、〇〇がまた大きくなつてるぞ！」

「みんなに裸を見られて感じてるのか！」

「エッチなことばかり考えてないで競技に集中しろ！」

応援席に座る生徒達の間から心ないヤジが聞

こえてくると、真琴は猛烈な恥ずかしさに襲
われ、競技中であるにも関わらず〇〇を恥ず
かしいほど大きく膨らませてしまっただった

■ 第一章 屈辱のムカデ競走

校庭では借り物競走が再開され、生徒達が懸命にグラウンドを駆け回り、借り物を集めて順位を競い合っていた。しかし、応援席に座る生徒や観覧席に座る保護者達のほとんどはそれを見ていなかった。彼らは校庭の一角に恥ずかしそうに佇む素っ裸のイケメン教師ばかりを眺め、体の奥から沸々と欲情を湧き上がらせていたのだった。

運動会の行われている校庭で、朝礼台の上で全裸オニーを披露した挙句、射精まで果たしてしまった真琴は、もはやどんな顔をして生徒や保護者達と向き合えば良いのか分かっていなかった。クラス委員の相葉からの指示で剥き出しの股間を手で隠す事のできない真琴は、大勢の視線がイチモツに集中するのを感じると、瞬く間にそれを大きく膨らませ、青空に向かって勢い良く勃起させてしまっていた。た。

「オイ見ろよ、三神先生またチ○コをあんなに大きく膨らませているぜ（笑）」
「さっきあれだけミルクを出したっていうのに、本当にド淫乱な教師だな（笑）」
「これじゃあ、また扱いてもらわないといけないんじゃないじゃねえの（笑）」
イケメン教師の勃起したイチモツを見た生徒達はそう言つて嘲笑い、再び過激なオ○ニーショ―が見られることを期待した。
暫くして、ようやく借り物競走は終わったが、真琴が生徒達に貸した服が返ってくるころにはなかった。それは、さっき校内アナウンスで流れたように、真琴に対する罰であり、哀れなイケメン教師は運動会が終わるまでずっと素っ裸でいなければならなかったのだ。校庭の一角に全裸で佇むイケメン教師は格好の見世物となり、生徒も保護者も、そして同僚教師達までもが競技を無視して真琴の体ばかりを見つめていた。ああっ、みんな僕の体ばかり見てる、恥ずかしい・・・。真琴は

まるで公開処刑にあっているような気分になり、全身が小刻みに震え続けていた。　　
恥地獄へ突き落とす校内アナウンスが流れた。　　
『三神先生に対する次なる罰として、この後のムカデ競走に参加して頂きます。三神先生
至急生徒達と一緒に入場ゲートにお並びください
さい！』　　
進行係の女子生徒が事務的な口調でそう告げ
ると、校庭には再び割れんばかりの拍手と歓
声が轟いた。　　
「イエーイ！　いいぞ！　イケメン教師を晒し者
にしろ！」　　
「三神先生のデカオンを誰か扱いてやれ！」　　
生徒達の心ないヤジが響く中、真琴は相葉達
に腕を引っ張られて強引に入場ゲートへと連
れて行かれ、そこで生徒達の列に並ばされた
次の競技種目であるムカデ競争は高校三年
生らが参加する競技で、五人一組で縦に一列
に並んで全員の両脚をそれぞれロープで結び

ムカデのように歩いて速さを競うものであつた。真琴はまったく面識のない三年生の生徒達の中に入り、競技を紹介するアナウンスが流れると同時に入場ゲートから生徒達と一緒に校庭に向かつて行進を始めた。

「よっ、変態教師、頑張れよ！」

「先生、チ○コがもうビンビンだね！」

「先輩達、その変態教師をまたヌイてやっってください！」

応援席に座る生徒達は、三年生達の列の中に一人だけ素っ裸のイケメン教師が混じって行進する姿を目撃すると、大声で罵声を浴びせた。

「ああっ、恥ずかしい・・・。真琴は両手を大きく振りながら行進しているところ、イチモツがそれに合わせて揺れるのが分かり、恥ずかしくて堪らなかつた。

「先生、ちゃんと歩いてください！」

真琴のすぐ後ろを歩く三年生の男子生徒はそう注意すると、イケメン教師の引き締まった

お尻をピシッと平手打ちした。
「ああっ」
真琴が痛みに思わず表情を歪めると、それを見た応援席の生徒達から失笑が漏れ、真琴をますます惨めな気持ちにさせた。
高校三年生の一団が校庭のど真ん中に集まると、クラス単位で五人ずつのチームに分かれ、縦一列に並んでそれぞれの両脚をロープで縛りつけた。真琴は近くにいた生徒達のチームに入り、なんと最前列で足を縛られることになったのだった。
「よし、スタート！」
ピストルの合図と共に第一組が一斉にスタートし、生徒や保護者達から声援が飛んだ。そんな中、真琴は緊張と不安に怯えながら自分の順番が回ってくるのを待っていた。
五人の一番先頭を歩かなければならない真琴は当然剥き出しのイチモツを観客に向かつておもいきり晒す事になり、その姿を想像すると恥ずかしくて、出番が回ってくる前から

勃起したイチモツがピクンピクンと痙攣して
いた。
「先生、しつかり歩いてくださいよ。俺達、
先生のせいで負けるなんて絶対嫌ですからね
「そうですよ、負けたら許しませんから」
「本気でやってくださいよ」
同じチームでムカデ競走に参加する三年生の
生徒達はそう言って、羞恥に震える素っ裸の
イケメン教師を脅した。
「わ、分かったよ・・・」
真琴は彼らのただならぬ気迫に圧倒され、も
はや恥ずかしさなど忘れて戦うしかないと自
分自身を追い込んだ。
而して、ついに真琴達の順番となり、真琴
は剥き出しのイチモツを晒しながらスタート
ラインに立った。
「よいい、スタート！」
ピストルの合図と同時に真琴は縛られた両脚
を交互に前に出して進み、後ろに並ぶ生徒達
の「イチ、ニ！イチ、ニ！」という掛け声に

合わせて歩き続けた。
「おいイケメン先生、チ○コがまた大きな
つてるぞ！」
「みんなに裸を見られて感じてるのか！」
「エッチなことばかり考えてないで競技に集
中しろ！」
応援席に座る生徒達のヤジが聞こえると、真
琴は猛烈な恥ずかしさに襲われ、思わず体を
硬直させてしまった。
「先生、もっと早く歩いてくださいよ！」
「このままじゃ俺達負けてしまうじゃないで
すか！」
真琴の背後に並ぶ三年生の生徒達からそう檄
が飛ぶと、真琴は何とか羞恥を押し殺して歩
き続けた。
しかし、真琴達のチームは同じ組でスター
トした他のチームにどんどん差を開けられ、
最下位に甘んじてしまっていた。
「このままじゃダメだ。もう先生に本気出し
てもらわなければならない」

真琴のすぐ後ろに立つ男子生徒はそう呟くと、いきなり右手を真琴の股間に伸ばし、背後からイチモツを驚掴みして抜き出したのだった。「ああっ、何をするんだ！やめなさい！ああっ」真琴は思わぬ事態に慌てふためき、イチモツを握る生徒の手を振り払おうとした。「先生、ちゃんと競技に集中してください！先生がもつと速く歩いてくれたら手は放します！」背後に立つ男子生徒は強い力で真琴のイチモツを驚掴みしたまま、イケメン教師を怒鳴りつけた。「すると、応援席に座る生徒達からも、イチモツを扱かれ悶えるイケメン教師に対して容赦ない罵声が浴びせられた。」
 「先生、ちゃんと真面目にやれよ！」
 「イチ○コを扱かれたくらいでグズグズするな！」
 「教師ならイチ○コのことなんか気にしてるん

「じゃねえぞ！」
皆、イケメン教師がイチモツを扱かれ悶える
姿を面白そうに眺め、再び射精の瞬間が見ら
れる事を期待しているようだ。
みんな、どうして僕を辱めようとするんだ
そんなに教師である僕が射精する姿を見たい
のか・・・生徒達の罵声を聞いた真琴は何
とも居たたまれない気持ちになった。そして
どうしようもない絶望感の中で抵抗すること
を諦めた真琴は、背後からイチモツを扱かれ
ながらも懸命に両脚を前に出して進み、ムカ
デ競走を戦った。
「ああっ、ああっ」
背後に立つ男子生徒は、真琴がスピードを上
げて懸命に歩き続けても尚、イチモツから手
を放そうとはせず、それを力強く扱き続けた
。「ああっ、もういいい加減手を放してくれ！」
再び射精が迫っていることを予感した真琴は
背後に立つ男子生徒に向かって懇願した。
「先生、何を言ってるんですか！もっと速く

歩 かな い と 放 し ま せ ん よ ！ ー
男 子 生 徒 は そ う 言 う と 、 手 に さ ら に 力 を 込 め
イ ケ メ ン 教 師 を 絶 頂 へ と 追 い 込 ん で い っ た 。
応 援 席 に 座 る 生 徒 達 も 観 覧 席 に 座 る 保 護 者
達 も 、 最 下 位 を 走 る 真 琴 達 ば か り を ず っ と 目
で 追 い か け 、 素 っ 裸 の イ ケ メ ン 教 師 が イ チ モ
ツ を 扱 か れ て い る 内 に だ ん だ ん 淫 ら な ア へ 顔
を 浮 か べ 始 め る と 、 目 を ギ ラ ギ ラ と 輝 か せ た
そ し て 、 再 び 射 精 の 瞬 間 が 訪 れ る の を 心 の 中
で 願 っ て い た の だ っ た 。

■ 海老沢薫 B L O G

<http://kaoruebisawa.blog.fc2.com/>

・ ・ ・ 海老沢薫の最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

■ 海老沢薫 Web 連載小説
『イケメン春輝 二十歳の憂鬱』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=31764>

・ ・ ・ 大学二年生の藤島春輝は、大学の学園祭のミスターコンテストに無理矢理エントリーさせられ、そのステータジ上で罍に嵌められ、大勢の学生達が見つめる前で死ぬほど恥ずかしい痴態を晒してしまう。それでも見事グランプリを受賞した春輝は、セレモニーとして一糸纏わぬ姿で大学のキャンパス内を練り歩き、他の学生達の見世物になったのだった。数日後、ミスターコンテスト実行委員会の学生から連絡を受けた春輝は、毎年恒例のグランプリ受賞者の記念写真集を製作する話を聞かされる。今年のステータジ上で前代未聞の痴態を披露した事からヌード写真集にすることが決まり、実行委員会の主要メンバーである須藤から脅され

た春輝は仕方なく撮影に応じることになり・・・。

後日、早速授業中の大教室で撮影をする。とになった春輝は、一番後ろの席で須藤に命じられるまま服や下着を脱いでいき、糸纏わぬ姿でポーズを披露する。

そうして撮影はだんだんエスカレートしていく、イケメン学生は授業中の大教室だけでなく、図書館や学生食堂でも極限の羞恥地獄を味わうことになるのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 | 体を賭けた
屈辱の取引 | 大型ショッピングモール編』

https://regimag.jp/bo/book_view/?book=18357

・ ・ 吉川聖哉は、大学生時代に起業した二十五歳の若き事業家だった。頭脳明晰で抜群のルックスを持ち、社交的な聖哉はまさにイケメン社長と呼ぶにふさわしい華やかさを備えていた。

大学生の頃には、将来有望な若手イケメン社長として一部のメディアでも取り上げられるなど、他人が羨むほど順風満帆な人生を送っていた。

しかし、いつしか聖哉の会社の業績は低迷し、華やかだった生活は次第に陰りを見せていく。

自分に付いてきてくれる社員のため、そして自分の理想のために会社を立て直すべく日夜必死に働き続ける聖哉。

かつて将来有望な若手社長としてもてはやされていたイケメン社長は、どんな泥臭い仕

事でも引き受けるようになり、心ない取引先
やユーザー達からの羞恥の命令にも従い、人
生を翻弄されていくのだった。

『イケメン社長 聖哉25歳 一体で償う屈辱のクレーム 会議室篇』

<https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=38623>

・ ・ ・ 25歳のイケメン社長、吉川聖哉は大学生時代に起業し、若くして成功したカリスマ社長であつた。

しかし、聖哉の会社は次第に業績が悪化し倒産の危機に瀕する状況まで追い込まれていった。

そのため、聖哉は会社存続のために新たに人材派遣事業を興し、様々な企業と取引を始める。

そんなある時、聖哉の元に大口の取引先から一本のクレームの電話が入つた。取引先の相手は電話越しに聖哉を激しく罵倒し、今すぐ自社まで謝罪に来るよう命じた。

ただでさえ倒産の危機に直面している会社は、この大口の取引先を絶対に失うわけにはいかず、慌てて謝罪へと向かう社長の聖哉。而して、取引先の会議室へ案内された聖哉

の元に担当部長と現場責任者、そして問題を
起こした当事者である聖哉の会社の社員が現
れ・・・。
平身低頭に謝罪する聖哉に対し、取引先の
相手は誠意ある謝罪を要求し、あまりにも屈
辱的な命令を突き付ける。
社長としてのプライドだけでなく、一人の
人間としての尊厳までも奪われるような命令
に聖哉は憤りを覚えずにはいられなかったが
自分の会社や社員を守り抜くために彼らの命
令に従う覚悟を決め、ついに底なしの羞恥地
獄へと堕ちていくのだった。